

第 1 回 議 事 概 要

日 時：平成18年 2 月22日（水） 15:00～17:00

場 所：釧路プリンスホテル 3階北斗の間

< 次第 >

- 1 . 開 会

- 2 . 主催者挨拶
釧路開発建設部長

- 3 . 委員・アドバイザー紹介

- 4 . 議 事
 - (1) 委員会の設置趣旨について
 - (2) 委員会運営要領（案）について
 - (3) 資料説明
 - (4) 討議
 - (5) その他

- 5 . 閉 会

< 配布資料 >

- 資 料 1：委員会の設置趣旨について
- 資 料 2：釧根地域将来像検討委員会運営要領（案）
- 資 料 3：地域の社会、経済状況等の現状及び将来予測について（別紙あり）
- 資 料 4：釧根地域将来像検討委員会の開催スケジュール
- 参考資料 1：第 6 期北海道総合開発計画の概要について
- 参考資料 2：地域の関連する計画等について
- 参考資料 3：地域の社会、経済状況等の現状（データ）について

釧路開発建設部次長

< 開会 >

釧路開発建設部部长

< 挨拶 >

事務局

< 資料確認および委員紹介 >

< 委員長選任（以降の議事については委員長に一任） >

小磯委員長

国と地方の新たな関係が始まりつつある中で、新たな総合計画の策定作業が進められている。

計画策定においては、地方からの意見をどのように組み入れるかが大きなテーマとなっている。

新しい総合計画に向けての意見、考え方というものを検討委員会の場で議論して、提起していこうということは象徴的なことである。

事務局

< 資料 1（委員会の設置趣旨）の説明 >

< 資料 2（委員会の運営要領）の説明 >

< 資料 3 の説明 >

小磯委員長

< 資料 3 の補足説明 >

事務局

< 資料 3 の説明（続き） >

小磯委員長

< 資料 3 の補足説明 >

事務局（未来総研）

< 資料 3 の説明（続き） >

< 欠席した田村委員の意見紹介 >

小磯委員長

< 資料 3 別紙の説明 >

石橋委員

後継者不足の中で、人口減少という問題は農業も避けて通れない。全国からの就農希望

者をいかにして呼び込むかが課題である。

後継者を確保できない場合は、法人化などで生産を維持できるシステムを作っていく必要がある。

釧根地域の酪農の戦略として、本州の需要に応えられる生産・輸送のシステムを作っていく必要がある。

釧根地域の農業は、酪農でしか生きられないが、環境問題、消費者の安全・安心に対する意識の問題ということも含めれば、日本で唯一残れる酪農地帯と考えている。

宮田委員

新千歳空港から道内各地域に交通インフラとしての道路があり、それに続いて釧路から域内の観光地への、また物流を含めた基本的な道路のインフラがある。これらについては地域の住民として訴えていかなければならない。釧路、根室管内を含めたエリアで考えて、地域でグラウンドデザインしていく必要がある。

道路については情報提供も含めて必要になってくるのではないかと。

海外からの、特に台湾などからの観光客が増えており、またファームステイやアウトドアなどの個別的な要望が増えていく中で、海外からの旅行者や個別旅行に対する情報提供を釧路、根室で整えていけないだろうか。

観光の裾野であるサービス業が北海道の中でも釧路は低いということだが、サービス業をつくっていく上でも、基盤をつくってビジネスをつくっていくことが必要ではないか。

情報インフラや先進的なアイデアなど、釧根地域の各地域が持つ強みを連携して、ユビキタスを利用したシステムの中で何かができるというようなビジネス基盤をつくるのが次のステップに必要なと感じた。

大島委員

先を考えるべきだと私自身は思っている。

釧根地域の将来については、域内、域外を含めた地域構造を推計すれば、どのような人口で、どのようなペイラインになるかということは分かってくる。

どこにどれだけ人口を配置して、インフラとしての道路のネットワークやITのネットワークについてコストのかからない地域構造にしていくのかという視点が必要である。

人口の減少と共に経済、社会的な数字をどう落とし込んでいくのかというターゲットを立てて、それに対してどのように対応していけばよいのかという観点で資料整理をしていくのがいいのではないかと。

栗林委員

釧根地域をベースに如何に生きていくか、存在意義を高めていくか、そこにいる価値を高めていくかということを考えると、それは北海道ベースではなく、対本州であり、対東アジアであり、海外に釧根地域を売っていくことが、あるべき姿であろう。

道東地域のものを海外に出荷するときに、外航コンテナ船が最も簡単な方法であり、コンテナを早く荷役する、あるいはどんなに遅く来ても荷役していくということを追求しているが、外国からはもっと早く、もっと便数が多く、活きのいいものを届けることが

できるようにすることを要求されている。今の状態ではまだまだ応えられない。社会資本整備と関わってくるときに、あらためて海外から釧根地域に求められるものが多いことを伝えたい。

近藤委員

経営でいうところの、既に起こりつつある未来への対応、既に人口が減少し、人が住まなくなるといった地域があることが見えている。それに対して地域としてグラウンドデザインをつくってどのように対応していくかということが、この地域でやらなければならないことだ。

漁業従事者の高齢化あるいは後継者不足で、地域の水産原料を使い、水産食品をつくって、それを全国に出荷する、その生産現場が疲弊している。釧根地域で対応していかねばならないのではないかと。

この地域は非常に食料自給率が高く180%もあるが、外に食料を出してお金を稼いでいるということは、何らかの輸送手段を使って外に品物を出していかねばならない。しかし、そのための物流インフラが貧弱である。この状況を改善していかないと、将来にわたって域外からお金を持ってくるということは、難しいのではないかと。

海外の旅行者が非常に増えている中で、国際化への対応というインフラ整備も非常に重要である。標識も英語、日本語、韓国語、中国語で標記するなど、多国語表示して、国際化に対応していくということもこれからは必要になってくるのではないかと。

三膳委員

浜中町は酪農と漁業とに分かれているが、観光がどれだけ自分たちに波及しているか、地域づくりという観点では、酪農はどんどん温度が高くなっているが、漁業の方はちょっと温度が低いと感じている。

環境に重点を置き、湿原を守っていきながら、観光であり、地域づくりである。自分達で今生活しているものが観光客に喜んでいただけるということは、まだまだ生産者たちが十分にわかっていないと思う。

辻中委員

この釧根では、マスツアーを収容できる大きなところ、エコツアーへ重点をおいていくところと、それぞれの地域、まちが一番得意なところに集中して観光をすすめていく必要があるだろう。

道東での観光には道路の整備が大切であり、釧路を拠点にしているお客さんが、知床の羅臼でオオワシを見て、それから雪の中を歩いて、また釧路へ戻ってくるというようなツアーは現状ではできない。釧路から根室や知床へのルート、道路というものの定時性、高速性が必要になってくる。

地元泊まらなくなるという心配もあるが、地元でなければ見られないというところをエコツアー等で作りだしていくことが、地域でなされなければならない。

町民でも地元のきれいな景色を知っている人がほとんどいないという状況にあるので、自分達のまちの人にまず知ってもらい、そしてまちの人が観光客に情報提供できるようになることが必要だ。それから、近隣でお互いに情報提供できるような連携の力を蓄え

ていくべきだ。

出村委員

農業というのは食糧生産という最も基本的な経済活動をしているが、それ以外に色々な外部効果を発揮している。代表的なものに、周りの自然環境、景観を美しく保つことがある。北海道では美瑛、富良野などで十分に観光資源になっている。

農業の環境問題は、北海道では畑作、酪農が中心となるために環境保全よりも環境汚染ということになる。

グリーンツーリズム、エコツーリズムがもっと活発になっていくと、農業の汚染問題と、観光振興をどのように調和させるか、その仕組みが必要になる。

農家にとっては、ふん尿関係に関する投資は所得を生まない過重な投資となっている。農業由来の汚染問題を解決し、なおかつ観光と調和させるためには、派手な投資ではないが、非常に重要な投資になる。

観光客にあるいは地元の人に地元の美味しい食材を食べてもらうことが観光の基本だと思う。資源はここにたくさんあるので、それをどう組み合わせていくのかということが、重要になる。

人口は確かに活動力の基盤であるが、人口が減るということをあまり大変だと言う必要はない。極端なことを言えば、今まで50坪にしか住めなかったけれども、100坪の住宅に住めるようになるということになる。

行木委員

人口が少ない過疎地、医療でいえば医療過疎地は、平たく言ってしまえば人材の過疎地ではないか。人がいないのは数ではなくて、あるレベルの人がいなくなっているということではないか。

もしかしたら日本で唯一こういう質を持った地域に人々が暮らしているという、この辺にしかないのじゃないかという、なんとなく目の前に見えてきたような気がする。

全国的に国立公園がいくつかあるうちの3つ、北海道のうちの3つがこの圏内にある。ここの人口は減っていくかもしれないけれども、国立公園全体が一体とした地域であるということに寄与した観光、そこに根付けるような産業をつくっていく以外に、長期的にはないのではないか。

国際性ということでは、ある意味では言葉の問題が非常に大きく、学校教育でも例えば簡単なロシア語、韓国語、中国語などの挨拶、道案内が使えたりというような言葉体験を、教育段階で体験できるような工夫があっているのではないか。

医療と、介護の時代だが、医療・介護はあまり産業としては評価されていない。医療や介護は立派な産業であり、しかも生活密着型で暮らしに直結しているし、需要もある。産業で言えば成長だと思う。

石橋委員

ふん尿処理の問題がありましたけれども、法律ができて当たり前のことになった。現在では、ふん尿の臭気を出さないような処理の仕方、奨励施策がある。

これは、地域の中で産業として生き残っていくための課題であり、対応していかなけれ

ば将来的に酪農が残っていけない問題だと受け止めて、今努力している。

辻中委員

エコツーリズムは地域の総合力である。景色がいいだけではだめで、そこに住んでいる人、仕事をしている人、それから産業文化を全部含めて、そのまちの力を見てもらうのが、エコツーリズムである。

インフラ整備の関係で、環境保護、保全そして景観を絶対はずしてはいけない。釧路、根室というのは自然との共生、共生する場だというようなことですめていけば、明るくなるのではないか。

小磯委員長

持続可能な開発がキーワードになる。この言葉は色々なところで語られているが、言葉が先行していて、実践はこれからの課題である。

釧路地域において、子供、孫の世代に自分達と同じような豊かな生活を引き継いでいく、そのために今どういう地域づくりをすればいいのか、そのための基盤整備はどうあるかということが求められている。

人口減少という少なくとも経験したことの少ないような時代における持続可能な開発の新しい地域のモデルが、この地域の中でどういう分野で、どういう取り組みの中で展開していけるか、どういうテーマがあるのか、ということについて今日各委員からいくつか提示された。

農業、観光、環境であれ、あるいは国際化時代に新しい産業展開をしていくという、それぞれの取り組みがやはり色々なかたちで連携し、そうすることによって地域の持続可能な開発というものを目指した一つのモデルになりうる。

難しい課題ではあるが、その具体策について、一つでも二つでも、具体的なものを出せるようなかたちで委員会を進めていきたい。

事務局

< 住民意向調査案についての説明 >

事務局

< 今後のスケジュールの確認 >

< 閉会 >